新型コロナ後遺症リスク、抗ウイルス薬で低減か　米研究

2022 年 12 月 23 日日本経済新聞

米ファイザー製の飲み薬「パキロビッド」=ロイター

新型コロナウイルス感染症による後遺症のリスクを抗ウイルス薬で低減できる可能性を示す研究報告が出てきた。米大学の調査では、感染確認から 5 日以内に米ファイザー製の飲み薬「パキロビッド」を服用すると、後遺症の症状を訴える人が約 2 割減った。後遺症は 2 年以上苦しむ人もおり社会損失が大きい。ウィズコロナの治療指針として期待を集める。

ジョンズ・ホプキンス大学によると、**新型コロナの感染者数は世界で 6 億 5 千万人を超えた。**後遺症はせきや息切れ、倦怠（けんたい）感、睡眠障害など症状は幅広い。現状の治療は、それぞれの症状に合わせた薬を処方するなど対症療法にとどまる。

米セントルイス・ワシントン大学の研究チームは米退役軍人省の医療データベースの記録をもとに、3～6 月に新型コロナに感染した 5 万 6000 人以上を対象と

米大学の後遺症調査研究		
対象	米データベースに登録された3～6月の陽性者約5万6千人	
手法	陽性判定後5日以内にパキロビッドを服用	
主な後遺症のリスク軽減率	倦怠感	24%
	息切れ	25%
	不整脈	27%
	神経や認知機能の障害	38%
	肝臓疾患	39%
	急性腎不全	39%
	筋肉痛	39%

して、心臓や呼吸器の疾患など12症状のリスクとパキロビッドの服用との関係を調べた。論文は査読前の医学論文を投稿する「medRxiv」で11月3日に公開された。
感染を確認してから5日以内に服用すると、12症状のうち倦怠感や息切れなど10の後遺症のリスクが約2〜3割減った。糖尿病とせきは効果が見られなかった。調査対象の大半が白人男性ではあるが、研究チームは「(早期の服用が)感染による入院や死亡の可能性を下げるだけでなく、長期にわたる症状のリスクも下げることを示した」としている。
後遺症の治療を目指した研究は米国などで進んでいる。米国立衛生研究所(NIH)はパキロビッドを候補の一つとしており、米デューク大などで臨床試験を2023年1月から始める。NIHは他にもいくつかの治療薬を試験する予定だ。
日本国内で承認された抗ウイルス薬は4種類ある。パキロビッドのほか、米ギリアド・サイエンシズの「ベクルリー」、米メルクの「ラゲブリオ」、塩野義製薬の「ゾコーバ」だ。このうちゾコーバはパキロビッドと同様の仕組みで、リスク低減が期待できる。後遺症の治療にあたる聖マリアンナ医科大学の国島広之教授は「(パキロビッドなどは)ウイルス量の減少効果があるため、後遺症の低減にもつながっている可能性がある」と話す。
複数回のワクチン接種が後遺症リスクを下げるとの報告もある。英保健安全局の2月の発表によると、ワクチンを2回接種した人は接種していない人に比べて後遺症のリスクが半分程度だった。
後遺症は長く苦しむ人も多い。デンマークの研究グループによる追跡調査では、170人のうち38%は2年後も何らかの症状があった。疲労感や味覚・嗅覚障害、記憶・集中力障害が多かった。
オランダの研究グループによる約7万6,000人を対象にした研究では、90〜150日の長期にわたって呼吸時の苦しみや筋肉痛、嗅覚障害などの後遺症が発生する確率を12.7%と推定した。8月に英医学誌ランセットに載った。
厚生労働省はこれまで、被害の実態を探る研究を支援している。国島教授は「後遺症は定義が様々で、人によって症状や患う時期も異なる。専門医だけでなく地域のかかりつけ医も対応できるようにして、気軽に受診できる体制が必要だ」と話す。(北川舞)